

少年非行に関する一試論：家庭教育の今日的課題

著者	古瀬 卓男
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	16
ページ	23-39
発行年	1982
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001872/

少年非行に関する一試論

—— 家庭教育の今日的課題 ——

A Study on Basic Factors in Juvenile Delinquency

—— What Home Education should Face and Solve ——

古 瀬 卓 男

Takuo FURUSE

I は じ め に

昭和55年に戦後最悪となり、その後も、引き続いて増加傾向を示している少年非行は、単なる教育問題としてではなく、深刻な社会問題と化し、各界に、大きな反響と論議を呼び起している。しかも、最近の少年非行の増加傾向からうかがわれる問題点は、決して一つ二つの限られた要因によるものではなく、もっと巾広い社会的な広がりを持ったものであり、大人社会の在り方と深く係わり合っている。その意味では、「少年非行は、少年不幸といった方がよい」程の認識のもとに、大人社会の重大な課題として、家庭・学校・社会が、それぞれ責任を他に転化することなく、国民的課題として総合的に取り組まなければならないという事は、誰人にも異議のないところであろう。

本稿は、総理府青少年対策本部や警察関係諸官庁が公表した統計資料を素材として、少年非行を巨視的に分析し、その動向、特徴、そして今日性などについて概観したうえで、近時の青少年非行の特徴を、いわゆる「遊び型非行」というよりは、むしろ「甘え型非行」と認識すべきものと主張し、そのような認識のもとに、少年非行の総量抑制の見地から、その行動主体としての非行少年の性格と、家庭教育とか、家庭における躰などとの関連について若干の考察をすることを目的としている。

II 少年非行の現状と問題点

最近発表された白書・論説の中に、少年非行の現状と特徴を端的に象徴する、二つの興味深い調査結果が公表されている。表1及び図1¹⁾²⁾がそれである。

表1は、日本の少年非行が、昭和26年に第1のピーク、昭和39年に第2のピークを示し、昭和48年以来増加傾向をみせながら、昭和55年には、戦後最悪の状態となり、第3のピークを形成したことを示している。戦後の少年非行が示すこの三つの波には、それぞれの時代背景と、それに³⁾基因する特徴があるが、昭和57年版警察白書は、以下のように解説している。

「第1の波は、終戦直後の混乱と経済的窮乏を背景として非行が激増したものであり、年長

表1 主要刑法犯検挙人員の推移

区 分	(A) 少 年		(B) 成 人		少年比	人 口 比	
	人 員	指 数	指 数	人 員		少 年	成 人
昭和25年(1950)	148,807	130	114	384,784	27.9	8.6	8.5
26 (1951)	157,549	138	113	380,142	29.3	9.0	8.2
27 (1952)	133,741	117	106	359,182	27.1	7.5	7.6
28 (1953)	115,942	101	102	343,754	25.2	6.4	7.1
29 (1954)	109,779	96	101	340,436	24.4	6.0	6.8
30 (1955)	111,126	97	105	355,393	23.8	6.1	7.0
31 (1956)	114,527	100	100	337,564	25.3	6.4	6.5
32 (1957)	128,699	112	100	338,889	27.5	7.0	6.2
33 (1958)	136,126	119	92	310,089	30.5	7.1	5.7
34 (1959)	152,838	133	88	297,603	33.9	7.6	5.4
35 (1960)	167,170	146	83	280,929	37.3	8.2	5.0
36 (1961)	185,140	162	83	280,255	39.8	9.0	4.9
37 (1962)	189,301	165	76	256,899	42.2	9.2	4.4
38 (1963)	193,048	169	74	248,321	43.7	9.5	4.1
39 (1964)	195,269	171	78	262,402	42.7	9.7	4.3
40 (1965)	184,926	161	77	259,877	41.6	9.2	4.2
41 (1966)	172,255	150	75	254,771	40.3	8.5	4.0
42 (1967)	151,506	132	72	243,518	38.4	7.8	3.8
43 (1968)	138,819	121	72	244,260	36.2	7.5	3.7
44 (1969)	129,627	113	70	236,190	35.4	7.3	3.5
45 (1970)	140,221	122	71	239,293	36.9	8.3	3.4
46 (1971)	133,324	116	67	227,575	36.9	8.1	3.2
47 (1972)	130,477	114	67	224,612	36.7	8.0	3.1
48 (1973)	139,885	122	67	224,678	38.4	8.7	3.0
49 (1974)	144,889	127	67	225,343	39.1	9.0	3.0
50 (1975)	145,763	127	67	225,652	39.3	9.0	2.9
51 (1976)	143,421	125	66	222,186	39.2	9.0	2.9
52 (1977)	147,823	129	66	223,100	39.9	9.0	2.8
53 (1978)	170,018	148	67	224,941	43.0	10.2	2.8
54 (1979)	176,776	154	62	208,538	45.9	10.5	2.6
55 (1980)	210,856	184	62	209,793	50.1	12.3	2.6

資料：警察庁犯罪統計書

(注) 1. 触法少年を含む。

2. 指数は昭和31年(1956年)を基準とした。

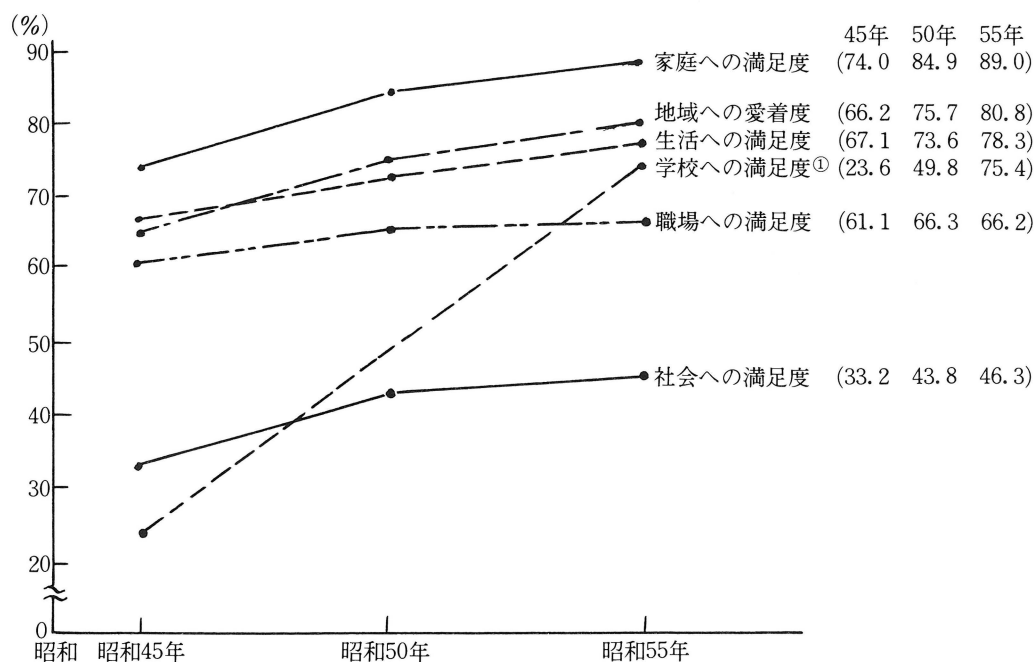
少年、特に有職、無職少年による窃盗、強盗、詐欺等の財産犯が中心であった。このピークも少年警察活動の基盤が整備されてきたことと併せて、朝鮮戦争を契機として経済が好転し、安定化するとともに次第に収束していった。

第2の波は、急速な経済成長に伴う都市化の進展、都市への人口集中、享樂的風潮の広まり等少年非行を誘発しやすい社会構造への変化を背景としており、年少少年による凶悪犯、粗暴犯が中心であった。(後略)

第3の波は、現在もなお続いている。社会的背景としては、高度経済成長によって欧米と並ぶ経済的豊かさを達成したなかで、連帯意識の希薄化、核家族化、価値観の多様化が進み、また、青少年の間に、せつな的な風潮や克己心の欠如という現象が広まったほか、少年を取り巻く有害環境が拡大していることが挙げられる。現在のピーク形成期における非行の特徴は、非行の低年齢化と一般化であり、非行形態としては、万引き・自転車盗等の初発型非行が多発しているほか、暴走族、校内暴力等の粗暴性の強い非行が著るしく増加しており、また、年少少年による通り魔事件のような衝動的かつ無差別的な凶悪犯・粗暴犯の増加も目立っている。」

法務省刑事局の松田昇青少年課長は、成人犯罪が、検挙人員、人口比ともに減少傾向をたどり、逆に、少年犯罪の急増は、55年には、少年比（全事件中に占める少年の割合）は、50.1%と成人犯罪を超えるに至ったことを指摘し、「最近の少年非行の急増⁴⁾は、異常というべきであり、今後のすう勢が強く憂慮されるところである。」と述べている。

図1 各領域の満足度の推移



① 学校への満足度は昭和45年と50年は学校に対する「希望がない」者の割合を、昭和55年は学校に対して「満足」、「まあ満足」な者の割合である。

図1は、昭和55年10月、総理府青少年対策本部が実施した『現代の青少年—青少年の連帯感などに関する調査—』結果による「現在の生活に満足感を持つ」青少年の増加を示すものである。この満足感、昭和45年には67.1%であったものが、昭和55年には78.3%と10%以上も増加していることが、特に注目されなければならない。昭和45年・50年と昭和55年とでは調査項目に違いがあるので、必ずしも明確ではないが、学校への満足感が急上昇を示していること、

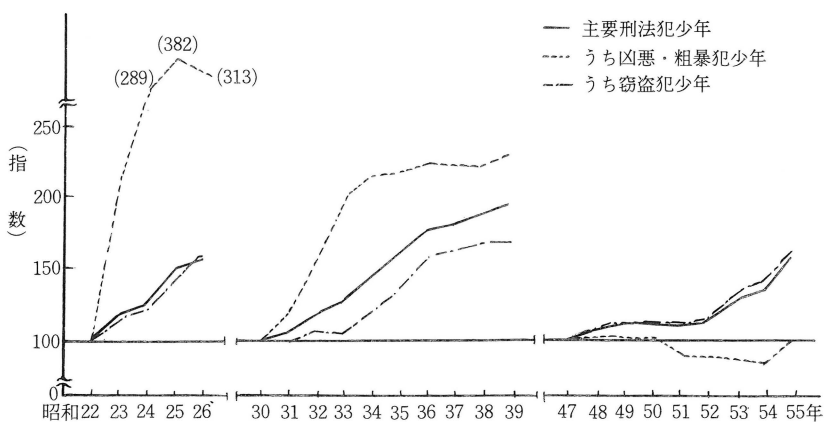
また、職場への満足感が横ばい状態であることも注目すべき点である。

表1及び図1の関係は、少年非行を考える場合、特に看過しえない重要性を持っている。それは、非行の急激な増加と、生活への満足感の増大という現象こそ、1970年代を経た現代の青少年の、誠に対照的な二つの側面を示しているからである。そして、相矛盾したと思われるこの二つの側面が、なんのためらいもなく、青少年の中に共存している現実こそ、現在の少年非行の背景を考える場合の視点に、しっかりと据えて置かなければならないことであろう。この基本認識の有無こそが、はじめに述べたように、現在の少年非行を「甘え型」と捉え、その行動主体としての非行少年達の性格と、家庭教育のかかわり合いについて、正確に理解しうるかどうかを分ける最大の問題点と考えるからである。

Ⅲ 少年非行の動行と特徴

法務省法務総合研究所がまとめた犯罪白書（昭和56年版）は、そのはしがきにおいて、特に少年非行にふれて、「我が国の少年非行については、少年の検挙・補導人員の増加率及び少年比は、いずれも著しく高く、既に、欧米諸国並み、またはこれを超えるに至っている。（中略）このような犯罪情勢にかんがみ、本白書は、これまでに公的資料の入手できた欧米四ヶ国の少年非行の動向及び少年司法運用の実情を概観し、（中略）これと対比しつつ、我が国の激増する少年非行の要因と背景及び対策についても言及した。」と述べ、少年非行問題が重大な局面を迎えていることを強調している。今や、大きな社会問題となってきた少年非行が、現在、どのような動向にあり、どのような特徴をもっているかについて、昭和56年版青少年白書及び犯罪白書の中に示された資料にもとづいて考察する。

図2 戦後3回の非行の“山”の形成過程^①



①資料出所：警察庁調べ

⁵⁾ 図2は、戦後の山が過去に2回あり、1970年代に入ってから一貫して増加傾向にある現状が、第3の山を形成しつつあることを示すとともに、前2回の少年非行の山と今回の山を比較して、幾つかの特徴を指摘しているものである。

青少年白書は、このことについて、「青少年非行の3つの山の形成過程について、各ピークの直前の底に当たる年の補導人員を100とし、主要刑法犯少年（総数）と、そのうちの凶悪・粗暴犯少年及び窃盗犯少年の推移を見ると、いずれの山においても、主要刑法犯の過半数を占める窃盗犯の動向に並行する形で、非行全体の増加が進行している。しかし、今回の山の特徴の一つは、前2回の場合と異なり、凶悪・粗暴犯が一時的に減少したことである。」と述べている。⁶⁾このことについて、もう少し詳しく考察する。

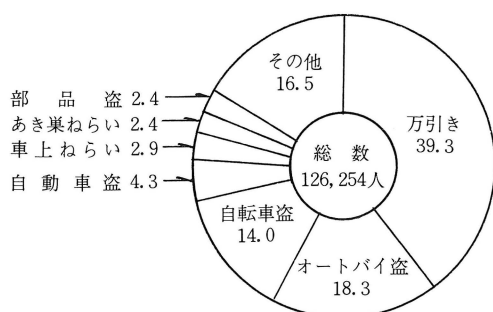
表2 罪種別刑法犯少年の推移(昭和47・54・55年)^①

年次 (昭和)	罪種 (人)	凶 悪・粗 暴 犯			窃 盗・横 領 犯			その他	合 計
		凶悪犯	粗暴犯	小 計	窃盗犯	横領犯	小 計		
47 年	(人)	2,848	19,011	21,859	71,806	1,477	73,283	5,709	100,851
54 年	(人)	1,718	16,151	17,869	110,215	7,906	118,121	7,168	143,158
55 年	(人)	1,930	19,886	21,816	126,254	10,069	136,323	7,934	166,073
55増減 年率	(%)								
	対47年	△32.2	4.6	△ 0.2	75.8	581.7	86.0	39.0	64.7
	対54年	12.3	23.1	22.1	14.6	27.4	15.4	10.7	16.0 0
47年に対する 55年の増減数		(人)							
		△ 918	875	△ 43	54,448	8,592	63,040	2,225	65,222

①資料出所：警察庁調べ

表2は、刑法犯少年が、55年には、47年比で、65,222人（64.7%）増加していること、しかも凶悪・粗暴犯が減少ないし横ばい状態であるのに対し、窃盗犯の増加は、54,448人、さらに、その99%以上が放置自転車盗（いわゆる占有離脱物横領）である横領犯を加えると、その増加数は63,040人に達し、総増加数65,222人の実に96.7%を占めていることを示している。青少年白書は、この事実について、「第3のピークは、専ら、窃盗及び横領という、いわゆる「遊び型非行」の増加によってもたされたものといえる。」と指摘している。⁸⁾

図3 窃盗検挙少年の口別構成比
(昭和55年)



(注) 1. 警察庁保安部の資料による。

2. 触法少年を除く。

図4 少年の窃盗の口別検挙人員指数の推移

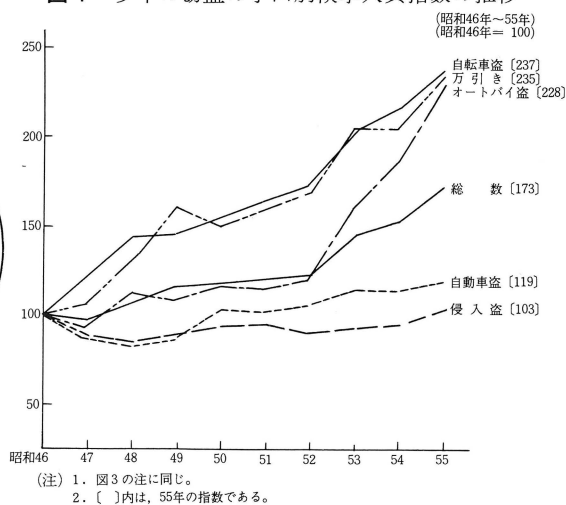


図3及び図4も、同様に、最近の少年非行の動向と、いわゆる「遊び型非行」の増加という特徴を示している。但し、表2に明らかなように、昭和55年には、前年対比で、凶悪犯において12.3%、粗暴犯において23.1%と大巾に増加している。(前掲図2参照)これは、校内暴力事件、暴走族事件の急増によるもので、この動きは、今後、青少年非行全体の動きに、大きな影響を及ぼすであろうことが憂慮されている。

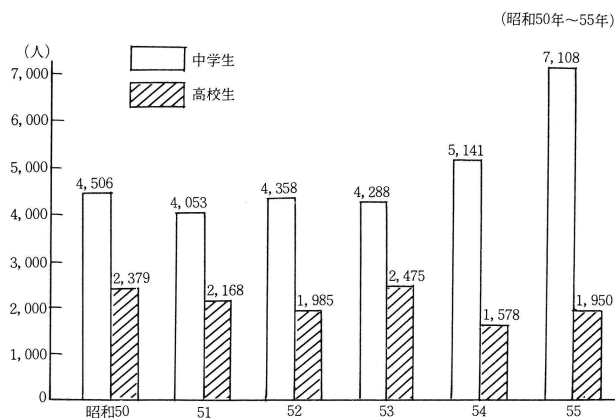
表3 年齢別触法及び刑法犯少年の推移(昭和47・55年)^①

年次 (昭和)	刑 法 犯 少 年			触法少年	合 計	16歳未満 少年の計
	14, 15, 16歳	17, 18, 19歳	小 計			
47 年 (人)	58,245	42,606	100,851	36,129	136,980	94,374
55 年	115,710	50,363	166,073	53,883	219,956	169,593
増 減 率 (%)	98.7	18.2	64.7	49.1	60.6	79.7
増 減 者 (人)	57,465	7,757	65,222	17,754	82,976	75,219

①資料出所：警察庁調べ

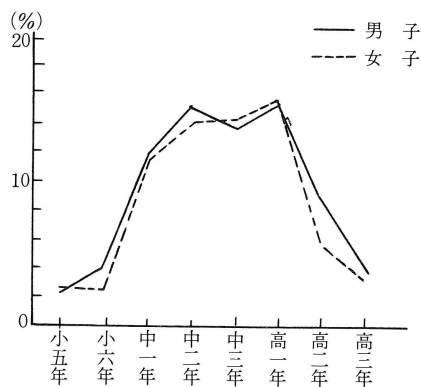
¹⁰⁾ 表3は最近の少年非行のもう一つの特徴である低年齢化の現象を示すものである。刑法犯及び触法少年の合計数は、昭和55年には、47年対比で、82,976人増、増加率は、60.6%となっている。しかも、この増加数の90.7%にも当る75,219人は16才以下であることに注目しなければならない。この傾向は、例えば、最近の校内暴力事件の大部分が中学校に発生していること、また家庭内暴力の初発時期が、男女とも高校1年生が最も多いが、中学3年生までに49.7%が暴力を振るい始めており、高校2年以降に初発するケースは極めて少ない現象とも一致している。¹¹⁾ ¹²⁾ (図5及び図6参照)

図5 学校内暴力事件の補導人員



(注) 警察庁保安部の資料による。

図6 暴力の初発時期



また最近の高校進学率の高まりによって、有職少年は減少し、少年非行の約70%は、中学生(41.7%)及び高校生(27.8%)が占める状況になっていることも、国の教育的課題として注

目されなければならない。

Ⅳ 甘え型非行論について

今まで述べてきたように、少年非行は、40年代後半から増加傾向を示しはじめ、特に、53年以降の急増ぶりは顕著であって、「豊かさの中の非行の多発現象」は、大きな社会問題となっている。しかも、最近の非行増加の最大要因は、前掲図4に明らかなように、万引き等犯行手口の比較的容易な非行（非学習型非行）の激増であり、反対に、手口の習熟を必要とする侵入盗は、減少ないし横ばいの状況にある。この現象は、少年非行の低年齢化や一般化、すなわち低年齢の一般家庭の少年による万引等の非行の増加が、非行全体の増加を支える重要な要素であることを意味している。このような少年非行の現状を、青少年白書が「遊び型非行」の増大と云っていることは、前に述べた通りである。

処で、前出の、法務省刑事局青少年課長松田昇氏は、現時の少年非行を「遊び型非行」と云うよりは、むしろ「甘え型非行」と呼ぶべきものとして、「遊び型非行の概念は、昭和45年版警察庁発行の『少年の補導及び保護の概況』の中で、年長者の再非行者による犯行のエスカレート等からとらえられる学習型非行に対比される概念であるが、この概念は、多義的であって、必ずしも明確ではなく、対象としている各非行の実態と必ずしも符合しないのではないかとの疑問が残る。」とし、また「その非行の本質部分を表現するのに適当な用語がどうか—昨今の暴走族の集団性や態様の悪質・凶悪化など—についても懸念なしとしない。またその語感・表現からは、少年の『遊び』の延長として非行があるとの誤解の上に立って、子どもの万引き等を、『遊びの範囲』として世人に認識させ、それ故に、これらの行為をかばったり、許したりする結果、非行を促進することになりかねない恐れも感得できよう。」と批判し、遊び型非行と云うよりは、むしろ、甘え型非行と云う用語ないし概念を用いた方が、より正確にその本質や特徴をとらえることができるのではないかとし、その論拠として、「万引き等の非行の特質・特徴は、①一般家庭の問題性の少ない普通の少年による実行、②被害が比較的軽微、③検挙後の再犯率が低い、④『遊び』として犯される場合も一部にある、⑤犯行が軽く実行され、法規範や自己の行為に対する認識の甘さが目立つこと等を挙げることができるが、究極のところ、この種の非行の特質は、⑤の法規範や自己の行為に対する認識の甘さにあると考えられる。この法規範等についての認識の甘さは、少年の自制心の欠如や、希薄さを生み、抵抗感がないか、あるいは薄い状態の中で、身勝手な弁解を自己の中に潜在させながら、非行が軽く実行される源泉となっている。ここに、この種の非行の本質があり、また、このような非行の実態は、万引き等の非行を、『甘え型』と呼ぶことを可能にしよう¹³⁾」と述べている。さらに、同氏は、「今日の非行増大の主因をなしているこの種非行は、被害は比較的軽微であり、かつ再犯率が低くて、一過性の特色を保有していることも事実であるが、問題の根は、もっと深い処にあると思われる。」として、「むしろ、この種の非行の問題は、現在の少年達の精神の未成熟と、規範意識の欠落や低下、善悪の区別と、それに伴う自制心の確立と云う基本的な社会上の躰が欠落

している点に、現在の非行、とりわけ「甘え型非行」問題の原点がある。(甘え型非行の) 再犯率は低いが、再犯少年の実数は増加傾向にあり、いつまで一過性の非行と云いうのか、そう楽観は許されない。さらに、少年の自制心の未確立は、一面において、学校内暴力・家庭内暴力及び通り魔的殺傷事件にも共通する要素をもっており、問題の根は深い。」と指摘している。¹³⁾ 遊び型非行の概念については、万引き等の非行を遊び型非行と見る立場で、青少年問題用語小辞典や、昭和55年青少年白書は、「万引き、乗り物盗や遺失物横領等、手段が容易で、動機が単純な遊び的色彩の強い非行」と定義している。しかし、法務省の調査による表4は、この定義と、これらの非行の実態とは、少くともその動機について、必ずしも符合しないことを明確にしている。

表4 非行少年の窃盗事件犯行動機別構成比
(昭和51年～55年)

年次	総数	遊び	困窮・生活苦	利欲	その他
51年	100.0 (6,575)	19.8	1.3	62.9	16.0
52	100.0 (6,271)	19.6	1.3	64.9	14.2
53	100.0 (7,168)	23.0	1.4	66.3	9.3
54	100.0 (7,363)	24.3	0.8	66.1	8.7
55	100.0 (8,527)	25.4	0.7	67.6	6.3

(注) 1. 法務省の特別調査による。同調査は、41年から法務省刑事局と法務総合研究所が共同で実施しており、対象者は、全国の地方検察庁が受理した少年事件(道交違反、業過及び簡易送致、追送致、他庁からの移送、再起等の事件を除く。)の中から無作為に10分の1を抽出したものである。

2. () 内は、実数である。

昭和51年以降5ケ年間ににおける非行少年の窃盗(そのうち万引等が55年で72%)の動機は、1位は利欲であって、62.9%～67.6%である。これに対し、2位の遊びは、19.8%～25.4%にすぎない。現在の少年非行は、まさに「利欲、(物質的欲望の充足)と遊び、(スリルとスピード)が総合した、現代型非行の特質である享楽型化を示すものであろう。」¹⁵⁾

これらの事情を総合して、最近の万引き等をはじめとする特徴的非行について、その特質を見直すと、前の松田氏の指摘のように、「甘え型非行」という用語ないし概念を用いた方が、より正確に、その本質や特徴を把握することができる。かくして、現在の少年非行を「甘え型」とし、その特質や問題点を考えると、非行要因の考察をとおして、行動主体の性格形成に最も重要な家庭教育の見直しについて言及しなければならないであろう。

V 社会や家庭に求められるもの

1. 非行要因について

少年非行の原因・背景については、様々の立場から、種々の説明がなされている。個々の非行には、それぞれに、独自の理由や要因もあるであろう。しかし、大量観察の結果、行動主体

としての青少年を中心として、非行要因を分類すると表5のようになろう。

表5 非行の要因

要 因		内 容
誘	狭義の「原因」	① 経済的状況（貧困、物質的欠乏等） ② 精神的状況（不満感、疎外感、絶望感等）
発	「環 境」	① 有害環境 ② 非行文化（非行を容認する風潮等） ③ 交友関係
抑	「内的抑制力」	① 性格（耐性、自律心、社会性等） ② 規範意識（倫理観、法意識等）
制	「外的抑制力」	① 法規制 ② 社会的規制 ③ 親・教師等の指導・規制

前掲の表1及び図1は、1970年代に入っの少年非行の増加が、青少年一般の生活に対する満足感の増大と明確に共存していることを示している。この事実と、表5とをつき合わせるとき、現在の少年非行は、誘発要因としての「貧困・不満等」の要因よりも、「環境」、「内外の抑制力」の要因が大であることを認めないわけにはいかない。さらに、昭和55年7月、総理府の実施した『家庭内暴力に関する調査研究』では、この種非行の青少年の性格特徴として、¹⁶⁾「わがまま」(78.6%)、「耐性がない」(65.7%)となっている。(表6参照)

表6 類型別性格・態度の特徴

順位	類型	家庭内暴力のみ		家庭内暴力 ＋登校拒否		家庭内暴力 ＋登校拒否 ＋非行		家庭内暴力 ＋非行	
		性格・態度	比率	性格・態度	比率	性格・態度	比率	性格・態度	比率
1	わがまま	55.7	わがまま	66.2	わがまま	76.0	わがまま	78.6	
2	耐性がない	43.7	耐性がない	53.4	耐性がない	73.3	耐性がない	65.7	
3	反抗的	40.7	反抗的	42.0	反抗的	59.2	反抗的	62.4	
4	神経質	34.3	神経質	41.0	行動が極端	46.1	落ち着きがない	39.8	
5	内向的	31.6	内向的	39.7	依存的	36.9	ルーズ	38.9	
6	依存的	27.3	依存的	31.5	ルーズ	34.2	行動が極端	38.4	
7	成績上位	26.3	行動が極端	29.6	落ち着きがない	33.6	依存的	34.0	
8	まじめ	22.8	落ち着きがない	23.2	ふまじめ	26.6	ふまじめ	33.0	
9	憶病	21.3	成績上位	22.8	内向的	25.5	内向的	21.2	
10	行動が極端	19.4	まじめ	20.5	神経質	20.6	神経質	18.3	
11	引込み思案	16.5	ルーズ	19.1	憶病	16.8	あきらめやす	16.5	
12	潔べき	16.4	潔べき	18.7	あきらめやす	14.1	憶病	13.6	
13	落ち着きがない	16.4	几帳面	17.8	成績上位	13.0	明るい	12.0	
14	ルーズ	13.9	憶病	17.8	明るい	9.2	成績上位	9.8	
15	完全主義	13.4	引込み思案	17.3	まじめ	8.6	潔べき	6.2	
16	几帳面	12.9	完全主義	15.0	引込み思案	8.1	引込み思案	6.0	
17	従順	8.9	従順	10.5	几帳面	7.0	まじめ	4.6	
18	明るい	6.9	あきらめやす	7.3	従順	6.5	従順	4.6	
19	あきらめやす	4.9	明るい	4.1	潔べき	5.9	几帳面	3.8	
20	ふまじめ	3.9	ふまじめ	0.9	完全主義	4.8	完全主義	2.9	
合計		437.2		498.4		526.0		510.3	
平均		4.4		5.0		5.3		5.1	

このことから、性格形成期としての幼少時における家庭等の養育・教育環境・躰の在り方等を、改めて問い直さないわけにはいかない。現在、学歴社会に対す絶望感がどうか、編差値選別が疎外感を生み出すとかの論議も多いし、そんな一面を必ずしも否定するわけではないが、最近の甘え型非行の異常な増大ぶりから、特にその感を深くする。同時に、万引き等の横行、青少年の飲酒・喫煙等の増加、不純異性交友の激増等は、青少年の法規範に対する認識の甘さとともに、外的抑制力、特に、「社会的規制」の弱化にかかわる問題、そして、「親・教師等の指導・規制」の在り方が、厳しく問われていることを認識しなければならない。

表7 有害環境との接触頻度の差の有無(男子)

有 害 環 境 と の 接 触	中 学 生	高 校 生	勤 労 者 等
喫茶店・スナックへ行く	◎	○	=
ゲーム・センターへ行く	○	=	=
自動販売機からポルノ雑誌を買う	○	=	=
ディスコで遊ぶ	○	△	○
成人映画を見る	△	●	▲
ポルノ雑誌を見る	△	=	=

(注) 表中の記号は、非行群との接触頻度の差を次の基準で表すものである。

◎：非行群が2位以上多い。○：非行群が多い。△：非行群がやや多い。

=：両群に差がない。▲：一般群がやや多い。●：一般群が多い。

¹⁷⁾ 表7は、いわゆる有害環境や、それとの接触頻度と非行との関係について、年少少年(中学生)について見れば、明白に相関することを示している。非行を容認ないし黙認するような社会風潮の拡大とともに、有害環境の存在自体が、年少少年の非行増大に大きく影響している。少年の主体性と、それに伴う自制心・耐性の育成を阻害するような社会的要因がこのように多いということは、「少年非行」の問題は、「それ自体が大人社会の課題」であり、「大人社会の在り方」に深くかかわって、むしろ「少年不幸」が在ると云わなければならない。かくして、「甘え型非行」の増加は、大人社会に対する痛烈な問題提起として把えなければならないし、このような認識がなければ、「適切な対応」などは、決して生まれて来ないであろう。

2. 家庭教育に問われる諸問題

少年非行、特に、今日増大化の主因をなしている「甘え型」のそれが、究極のところ、法規範や、自己の行為に対する認識の甘さにあり、その甘さが、さらに、少年の自制心の欠如や希薄さを生み出して、非行が軽く実行されていることに本質があることは前述のとおりである。

したがって、少年達の自制心とか、耐性とかが養われるために中心的役割を果たすべき家庭教育の在り方を、当然に、問い直さなければならない。それでは、日本の家庭教育が問われるべき問題点は何なのか。このことを、総理府青少年対策本部が実施した『世界青少年意識調査』¹⁸⁾の結果にもとづいて考察してみよう。

白書は、まず、家庭環境調査の結果について、図7・図8及び表8によって「日本の家庭は、ややうまくいっていたと答えた者を含め89.3%で、諸外国とほとんど変らない。ややうまくい

図7 育った家庭に対する評価

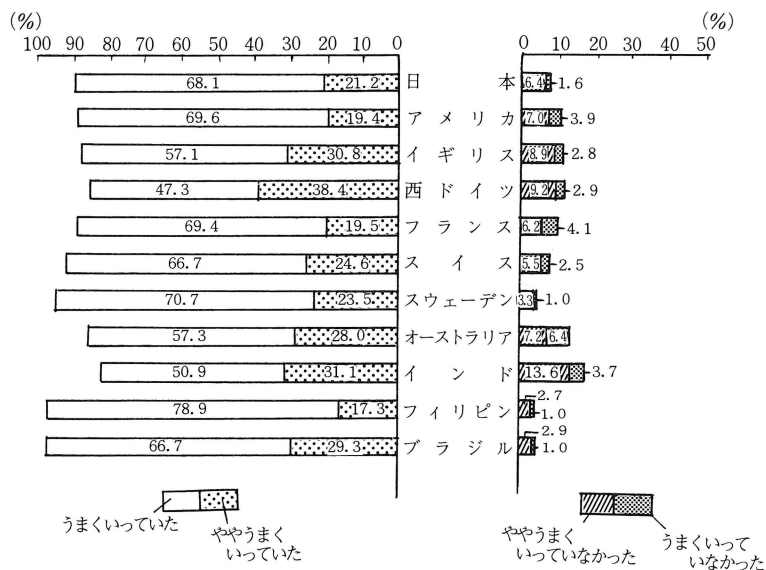
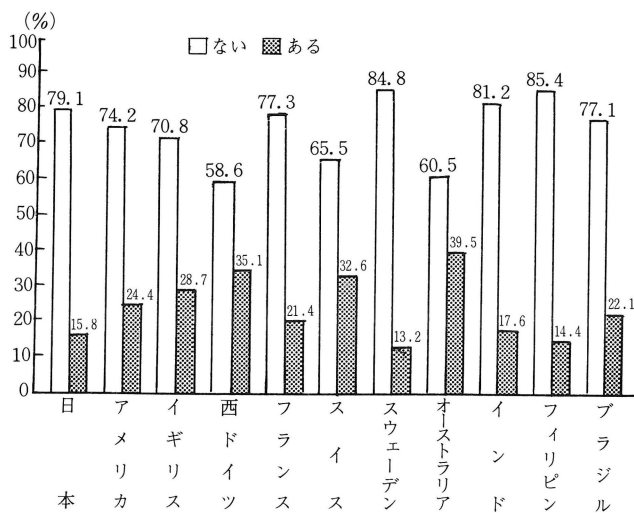


図8 過去3年間に両親と意見対立があったか



っていなかった、うまくいっていなかったと答えた者は、日本は少なく、特に、うまくいっていない者の少さが目につく。さらに、他の先進諸国に比して、両親との意見対立のあった者は、日本は少なく、日本の家庭は、一般的にうまくいっていると云える。また、両親との間で重大な意見の対立をみた者について、その内容をみると、日常的な事柄、人生観、異性問題をあげている者が多い点で、日本も他の先進国も同じである。」と解説している。¹⁹⁾しかし、この解説は、安易にすぎはしないであろうか。表8に示された、元来自己の主体的選択で決定すべき「進学」についての、日本の親子間の意見対立の異常な多さはなんであろうか。白書の解説

表8 親子間での意見対立の内容

項 目	日 本	ア メ リ カ	イ ギ リ ス	西 ド イ ツ	フ ラ ン ス	ス イ ス	ス ウェ ー デン	オ ス ト リ ア	イ ン ド	フ ィ リ ピ ン	ブ ラ ジ ル
(総 数)	(315)	(516)	(561)	(679)	(429)	(645)	(262)	(781)	(350)	(297)	(430)
1 日常的な事柄 (服装, お金の使い方, 髪型や帰宅時間など)	34.3	47.2	34.8	44.2	38.7	39.2	35.1	52.5	52.7	55.5	31.2
2 人 生 観	29.2	36.5	31.2	47.9	44.9	53.2	24.4	49.9	38.1	20.2	30.0
3 異 性 問 題	22.5	32.0	30.5	26.8	21.6	25.1	11.5	40.6	3.1	11.8	10.0
4 進学のこと	17.1	8.9	3.6	6.8	6.9	4.3	4.6	6.3	6.3	9.7	5.6
5 仕事のこと	14.6	13.7	9.3	10.6	6.7	10.9	6.1	17.3	38.1	23.6	7.7
6 就職のこと	14.3	17.1	13.9	8.8	13.4	3.7	5.7	18.4	21.4	20.0	8.1
7 勉強のこと	7.3	19.5	8.0	10.0	20.1	13.2	13.7	21.8	12.4	16.1	7.0
8 同性との友人関係	6.3	8.9	5.3	16.1	11.0	11.6	2.7	15.4	5.1	13.5	8.4
9 宗教問題	5.1	10.3	6.6	5.9	7.3	11.3	1.9	21.0	8.3	1.5	4.4
10 政治問題	4.8	7.2	5.7	12.5	14.0	10.5	8.4	16.4	6.4	3.0	1.9
そ の 他	11.4	32.0	19.6	12.5	14.3	9.3	21.4	6.7	1.6	1.1	17.9
無 回 答	2.9	0.9	2.5	1.3	2.2	1.1	9.5	2.8	1.0	1.1	1.6

(複数回答)

は、むしろ、「進学」について親の全精力が使われ、そのために、他のことについては、大体子どものいいなりになっていて、それが、子どもにとって「よい家庭であった」もので、日本の親の甘さを露呈している。」と書き直す必要があるように思う。この種の親の甘さが、子どもの将来にとって、どれ程のマイナスになるかを再考しなければならないであろう。

図9 家庭生活に対する満足度

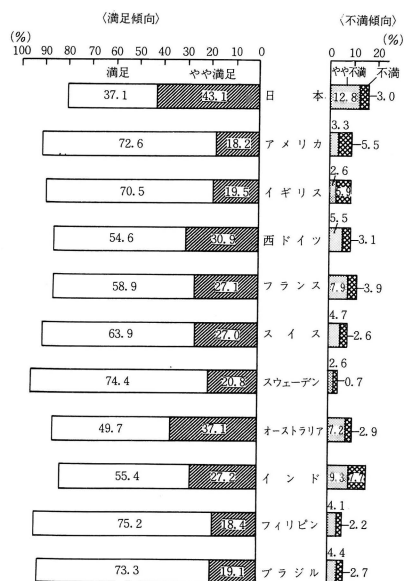
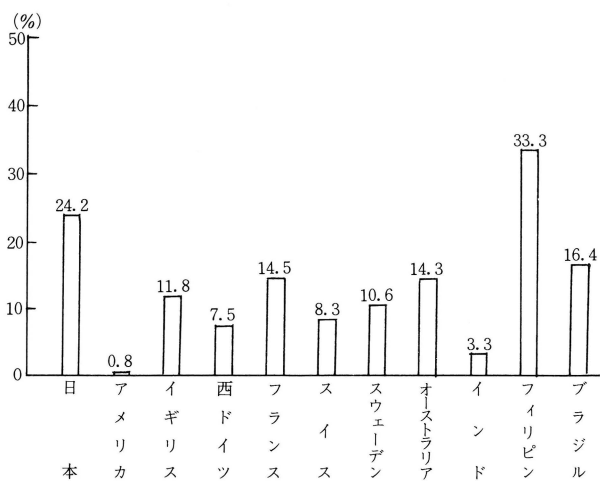


図10 家庭生活に対する不満の理由で「ただなんとなく」と答えた青年の割合



(注) 割合については、家庭生活で、「不満」、「やや不満」の回答者の少ない国もあり、その点に、留意する必要がある。

トーマス・マンは、²⁰⁾にも拘わらず、ではなく、²⁰⁾が故に、であるという。人間の成長とともに、彼の前に拡がっていく集団は、決して同質のものではない。両親の十分な愛情と、経済的にも裕福な家族集団の中で育つことは、子どもにとって、家族集団のみについて云えば、良い環境であることは云うまでもない。反対に、外部の冷たい風に当らなければならないという状態は、家族集団のみについて云えば、もとより悪い環境であろう。しかし、早くからこの冷たい風に当って育った²⁰⁾にも拘わらず、ではなく、²⁰⁾が故に、人間は、後年、社会集団に出た時、却って良く適応することも可能である点に留意すべきであろう。

図9及び図10は、「家庭に対する満足度」についての調査の結果である。青少年白書は、「全体的に見ると、世界各国の青少年とも、満足傾向が強い。しかし、日本の場合、満足傾向は、諸外国に比して全体的に低く、しかも、やや満足の比率が高くて、満足が少ない点が特徴的である。」と説明している。²⁰⁾しかし、さきの「親子間の意見対立」は、諸外国に比べて、全般的に少ないにもかかわらず、不満傾向の者のあげた理由が「ただなんとなく」と極めて漠然としている者の比率が、諸外国に比べて、かなり高くなっていることに留意しなければならない。極端な云い方をするならば、「進学のこと以外は、大体なんでも云うことを聞き入れてくれる良い家庭の中で、ただなんとなく不満をもって生活している日本の甘ったれ青少年」の多さを示しているということにならないであろうか。日本の家庭教育が、深刻な反省を必要とする点であろう。反省すべきことは、「家庭の躰と役割分担調査」にも見られる。

図11 お父さんやお母さんからよく注意されることがら

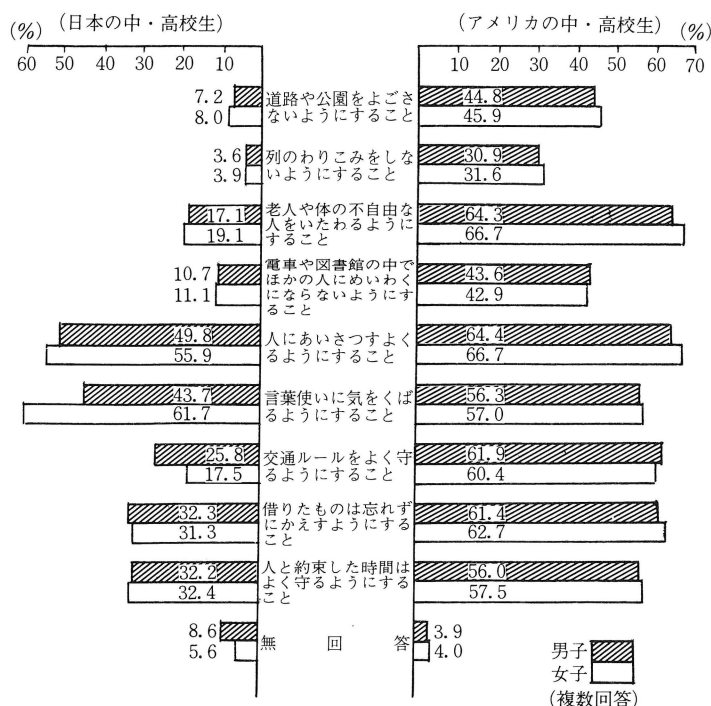


図12 家で自分の役目としてやったり、やらされたりしているもの

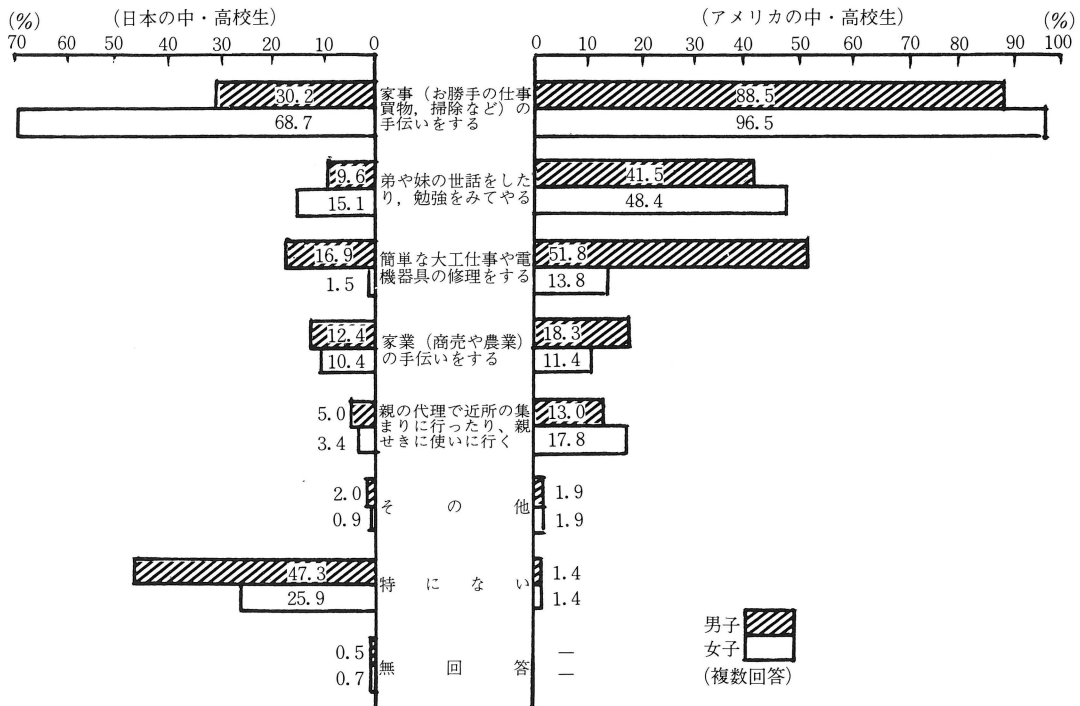


図11は、日本の家庭における両親の注意が、挨拶と言葉使いの二つが中心になっていることを示している。しかし、それとて、アメリカに比して比率は低い。さらに、アメリカの親は、日本の親に比べて、いろいろな事柄について繰り返し注意を与えていることがうかがえる。日本の家庭における「躾の甘さ」を示唆しているものと云えよう。

子どもに対する甘さは、図12の示す「家庭における役割分担」にもよく現われている。家庭の役割分担について「特にない」者の比率は、アメリカに比して、男女とも極めて高く、男子で約半数、女子で4人に1人の割合となっている。日本で最も高い「家事手伝い」にしても、アメリカに比べると低く、しかも、日本の場合、男女差が著るしいことも特徴的である。このあたりが、現代の中・高校生にまつわりついて離れない進学問題とかかり合っている点であろうが、しかし、世界的に見て、日本の親が「家庭における親の責任の不確かさ」と批判される点の代表的なものであろう。このような家庭生活の中で、例えば「勤労感の確立」も「人に対する思いやり」も育成することが困難なことは、現の当然であり、「わがまま」で「耐性のない」子ども達が増加しても、なんの不思議もない。

最後に、親との接触・交流調査について考察してみよう。

図13及び図14によると、全体的には、日本の中・高校生は、アメリカの中・高校生に比べると、接触・交流の割合が低い。しかも、「あまり話し合わない」、「ほとんど話し合わない」者の合計は、日本は、全体的にも、男女別でも、アメリカの約2倍であり、親子間の接触・交流は、やや貧困のように思われる。さらに、その貧しさは、頻度についてだけではなく、取りあがら

図13 お父さんやお母さんとよく話しかるか

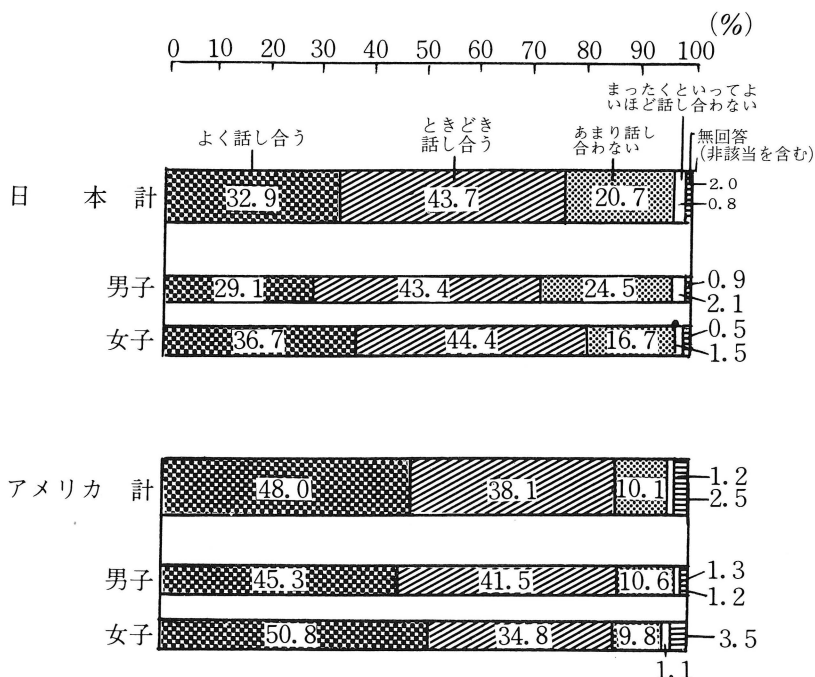
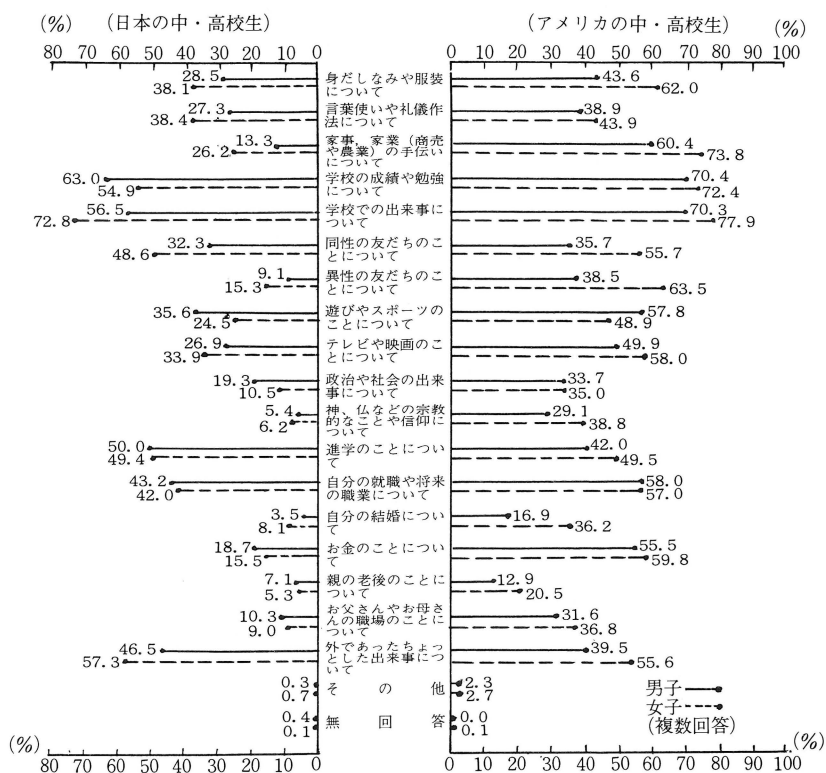


図14 お父さんやお母さんとの話題



れる話題についても同様である。日本の中・高校生は、「学校の成績・勉強について」、「学校での出来事について」、「進学のことについて」話題が集中している傾向がみられる。それに比べて、アメリカの場合、全体的に家庭における話題が豊富である。社会存立基盤そのものの違い、長年にわたる家庭生活慣行の相違があるにせよ、アメリカの家庭が、このような生活を通しての子どもの人間性の育成・陶冶について、日本よりはるかに高い役割をはたしていることは、認めないわけにはいかない。

現時の「甘え型非行」の特質を考える時、基本的には、少年自身の規範意識や自制心・耐性のかん養が何よりも必要であり、そのためには、少年自身の自覚が要であることは言うまでもない。しかし、少年の主体性と、それに伴う自制心・耐性を阻害する社会的要因も多い。その意味で、「甘え型非行」の増加は、大人社会に対する痛烈な問題提起と捉えなければならないが、他方、幼少時より、自制心・耐性などを促進し、育成すべき場として、特に、家庭における、真の意味での「躰の機能」の充実ないし回復への取組みが不可欠であり、その努力が期待される処である。

Ⅶ お わ り に

「鉄は熱いうちにたたけ、という。しかし、こんな言葉さえも死語となったのであろうか、と時に思う。

昭和57年8月29日、総理府は、『乳幼児に関する世論調査』をまとめた。それによると、少年非行の原因は、幼いころの躰や、家庭教育にある、と64%の人が答えながら、躰が行き届いていない、とする人が、51%を占めている。しかも、乳幼児を持つ親の4人に1人が、²⁴⁾「しかり方、ほめ方、に不安を持っているという。

「現代の親は総じて甘い。乳幼児からの発達段階に応じて、親の接し方もまた変わっていかなければならない。親として、本当に子供の躰け方がわからないというならば、親はきちんと学習しなければならない。²⁴⁾「今の子は恵まれている、と考えるだけでは、しっかりした子供は育たないであろう。」ことは当然である。

とは云いながら、少年非行についての特効薬的対策などあろうはずもないし、この小論の意図している処も、Ⅰの「はじめに」の中で述べたように、増加しつづけている少年非行の今日の特徴を考え、その総量抑制の見地から、家庭教育が、今何を問われているかを考察しようにするにすぎず、家庭教育に、少年非行の全責任を押しつけることなどでは決してない。

少年非行の遠因は、やはり、社会の様々な病理現象にこそ真の病巣があり、そして、これは、社会構造、政治体制の問題として捉えらるべきである。ある意味では、非行少年こそ、社会病理の犠牲者であり、少年非行は、大人社会への痛烈な問題提起であると考えらる。

引 用 文 献

- 1) 松田昇：少年非行の動行とその問題点，ジュリスト，No.758，1982，p.112

- 2) 総理府青少年対策本部編：現代の青少年，大蔵省印刷局，1981，p.187
- 3) 警察庁編：警察白書昭和57年版，大蔵省印刷局，p.10～11
- 4) 松田昇：前出，No.758，p.111～112
- 5) 総理府青少年対策本部編：青少年白書昭和56年版，大蔵省印刷局，p.65
- 6) 総理府青少年対策本部編：前出，昭和56年版，p.65～66
- 7) 総理府青少年対策本部編：前出，昭和56年版，p.66
- 8) 総理府青少年対策本部編：前出，昭和56年版，p.66
- 9) 法務省法務総合研究所編：犯罪白書昭和56年版，p.279
- 10) 総理府青少年対策本部編：前出，昭和56年版，p.67
- 11) 法務省法務総合研究所編：前出，p.295
- 12) 総理府青少年対策本部編刊：家庭内暴力に関する調査研究，1980，p.7～8
- 13) 松田昇：前出，No.758，p.116～117
- 14) 松田昇：前出，No.758，p.118
- 15) 法務省法務総合研究所編：前出，昭和56年版，p.288
- 16) 総理府青少年対策本部編刊：前出，1980，p.15
- 17) 総理府青少年対策本部編刊：非行原因に関する総合的調査研究，1979，p.54
- 18) 総理府青少年対策本部編：第2回世界青年意識調査，1980，p.194～196
- 19) 総理府青少年対策本部編：青少年白書昭和53年版，大蔵省印刷局，p.10～12
- 20) 総理府青少年対策本部編：前出，昭和53年版，p.13～14
- 21) 総理府青少年対策本部編刊：家庭と青少年調査，1976
- 22) 総理府青少年対策本部編刊：前出，1976
- 23) 総理府青少年対策本部編刊：前出，1976
- 24) 北海道新聞：なぜ，しつけが行き届かぬか，昭和57年8月31日付朝刊社説

(1982・9・6)

(付 記)

佐々木秀一教授のご退任にあたり，先生より頂きました公私にわたるご懇切なご助言に対し心より御礼申しあげます。これからも一層ご健勝で，私どもをご指導下さいますようお願い申しあげます。